

進路指導を行う高校教師がもつ今後の看護課程についての認識

高畑晴美 前田真紀子 太田武夫 喜多嶋康一 近藤益子

要 約

近年、4年制大学の増設をはじめとした看護課程における教育の変革が進められつつある。これは質の高い看護の人材を必要とする社会のニーズに応えたものである。著者らはこれらの看護課程に対する意見を、岡山県下の高校で進路指導をしている教師に尋ね、郵送による質問紙法を用いて33名の回答を得た。その結果、以下のことが分かった。

1. 51.5%の教師は、看護大学が増えると進学希望者の関心は呼ぶとしており、36.4%は、学生数の一定の増加があるだろうとしている。また、36.4%は教師の立場から看護課程への進学を勧めやすくなると考えている。
2. 高校の教師は看護婦不足の理由として労働条件の厳しさを指摘している。
3. 高校教師は進路として看護課程を勧める理由を仕事の専門性と奉仕性を多くあげていた。これらは、高等教育化と看護職のイメージの改善の両方が必要であることを示唆している。

キーワード：看護婦イメージ，看護教育，高校教師

はじめに

近年看護に対する社会のニーズが高まり、質の高い看護実践能力が求められるようになってきた。これをうけて「科学的な知識・技術と深い人間理解を基盤にした実務家の育成とともに看護学を発展させる人材の基礎づくり」を目的とした大学課程における教育が推進されつつある¹⁾。その結果、看護の4年制大学の設立が相次ぎ、平成6年度には全国で28校を数えるに至った。10年前にはわずか6校であったことと比較すると、この数の増加は著しく、今後も増え続けることが予測される。しかしこのような一方で、わが国では人口構成の変化に伴い、高校生の人数も年々減少傾向にあり²⁾、今後看護課程に進学を希望する者の数がどのように変化するかという予測は容易ではない。

高校生の看護系への進路決定に影響をもたらす因子としては、まず生徒自身の意志が最も多く、次いで担任教師の助言が多いとされている³⁾。ま

た一方高校の教師側からは進路指導に必要な看護課程についての情報が不足しているという訴えが認められる^{4),5)}。

また、看護職に対するイメージは、常に現実との間にズレが存在すると言われ⁶⁾、高校教師においても、異なるイメージを抱いている可能性がある。そしてそのようなズレが、生徒への助言にも何らかの影響をもたらしていると考えられることのできる。

また今日、大学教育の中で最も変革が進められつつある看護学教育の場合、高校教師が、その内容について、逐次十分な情報を得ることは困難であろうと考える。そのような中で、資質の高い看護職への人材を、看護界がより多く確保するために、看護界に対する社会的期待や、高等教育としての看護課程について理解を深めてもらうことが重要であろう。そして、そのためのより広い情報を看護教育関係者が提供するにあたっては、現在

高校教師がどのようなイメージを看護に対して持っているか、まず把握しておくことも必要であろう。

以上のような考えから、特に4年制大学における看護教育に関して、岡山県下にある高校の、進路指導を担当する教師に意見を求めて調査を行ったが、以下はその結果をまとめたものである。

研究 方 法

1. 対象

本調査は岡山県下の公・私立高校76校の進路指導を担当している教師を対象とした。

2. 調査方法

調査は郵送による質問紙法とし、1993年11月上旬に行った。

質問紙の内容は以下の3項目より構成した。

- 1) 看護課程を志望する学生の動向
- 2) 看護婦不足の理由
- 3) 進路としての看護課程に対する意見

なおこの調査は前報⁷⁾の高校生に対する看護職のイメージ調査と同時に行ったものである。

3. 分析方法

データ分析はHALUBAU(現代数学社)の統計パッケージを用いた。比率の計算にあたってはカイ2乗検定によったが、分割表の値が5以下の場合にはフィッシャーの直接確率計算法によった。

結 果

質問紙の配布数は76校であるが、回答者数は34名(回収率44.7%)であり、そのうち不完全な回答1を除いた33名(43.4%)の回答を有効回答として分析した。

1. 回答のあった高校の内訳

普通科のみの単科校は20校(60.6%)、普通科との混合学科校は(衛生看護科1校を含む)8校(24.2%)、普通科を含まない商業、工業学科の高校は5校(15.2%)であった。このうち大学進学率50%以上の高校(以下進学校とする)は16校(48.5%)であった。

33校のうち過去1年間に何らかの看護課程に進学している高校は26校(78.8%)であった。各校

の進学状況は表1に示した通りである。看護課程に進学した26校のうち8校(24.2%)が看護大学へ進学しており、それらの高校には進学校が多かった。(P<0.05)

表1 看護系の教育機関への進学状況

教育機関	学校数
大学・短期大学・専修学校	8
短期大学・専修学校・准看護学校	2
大学・専修学校	1
短期大学・専修学校	4
専修学校・准看護学校	5
短期大学	1
専修学校	2
准看護学校	3
合計	26

2. 看護課程を志望する学生の動向

今後、看護課程を志望する学生について「学生の関心」「受験希望者」「進路としての勧めやすさ」の視点より尋ねた結果をそれぞれ表2、3、4に示す。

表2 進学希望者の4年制大学看護学科に対する関心

	人数 (%)
関心と呼ぶ	17 (51.5)
変わらない	8 (24.2)
分からない	8 (24.2)

「看護大学は進学希望の学生にとって関心と呼ぶ」と回答した者は51.5%と約半数であった。

表3 4年制大学看護学科増設に伴う看護系受験者数の増加

	人数 (%)
増える	12 (36.4)
変わらない	12 (36.4)
分からない	9 (27.3)

「看護大学ができると看護課程への受験希望者は増える」と回答した者は36.4%であり、「変わらない」と回答した者と同じ割合であった。

「看護大学は進路として勧めやすい」と回答した者は36.4%であり、「分からない」と回答した33.3%とほぼ同じ割合であった。

表4 進路としての4年制大学看護学科の勧めやすさ

	人数 (%)
勧めやすい	12 (36.4)
変わらない	9 (27.3)
分らない	11 (33.3)
その他	1 (3.0)

過去1年間に、看護課程（看護大学を含む）に進学をしている高校と進学していない高校が、志望者についての認識に影響をもたらしているか分析したが、両者間に差は認められなかった。

同様に、普通科の高校とそうではない高校との間に、志望者についての認識に対する影響があるか分析したが、差は認められなかった。また、進学校とそうでない高校との間にも、志望者についての認識に対する影響は認められなかった。

3. 看護婦不足の理由

「看護婦不足がわれています。主な理由と思われるものを選んでください」という問に対する回答（複数回答あり）は図1に示すように「勤務時間の厳しさ」が最も多く、次に「仕事の内容の厳しさ」が多かった。また、かつて「きつい」とい

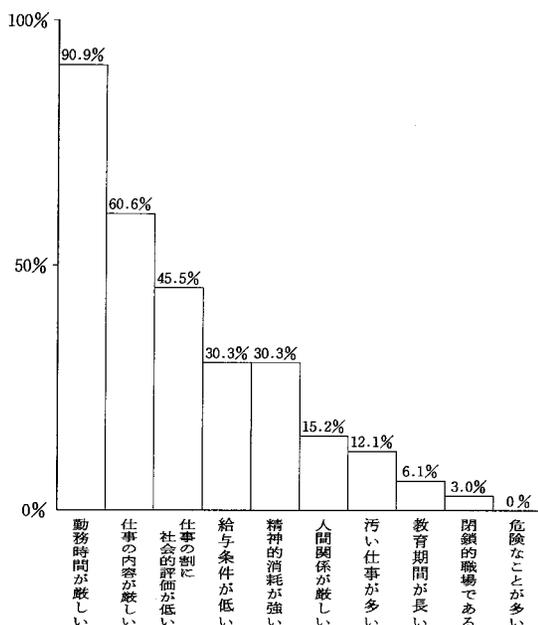


図1 高校の教師が考える看護婦不足の理由

う言葉とともに、看護婦の代名詞として用いられていた3Kのうちの「汚い仕事が多い」については12.1%と多くはなく、「危険な仕事が多い」という項目を選んだ回答はなかった。しかし勤務時間や仕事内容、給与といった労働条件に関するいずれかを回答している者は31名（93.9%）を占めていた。

4. 進路としての看護課程に対する意見

「将来の進路として、学生に看護課程を勧める場合の主な理由を選んでください」という問に対する回答（複数回答あり）は図2に示すように「専門職である」が最も多く、次いで「人の病気治療に貢献できる喜び」や「人と関わる喜び」とい

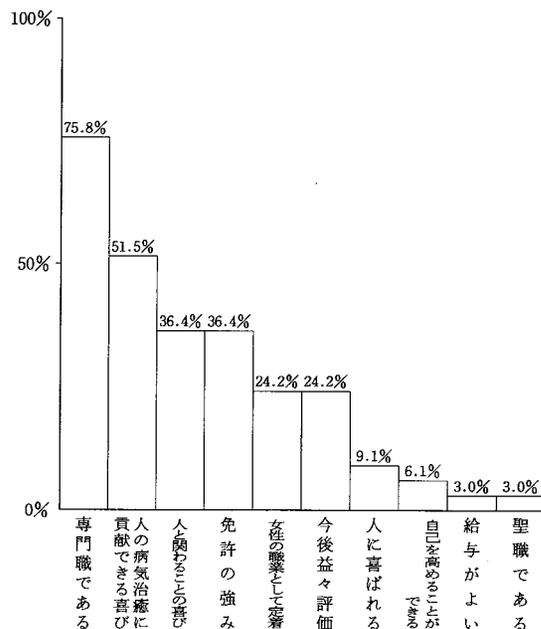


図2 高校の教師が学生に看護課程を勧める場合の理由

た人間的ふれあいを意味するものが多かった。この「専門職である」という回答は、科学性の高さを指しているというより、免許に裏付けされた固有の技術を指している可能性が高い。

これらに次いで、「免許の強み」や「女性の仕事として定着」、「給与がよい」といった現実的利点や、仕事としての安定性を示すものが続いている。しかし、給与条件については、勧める材料とはな

っていない。

「看護婦不足の理由」を否定的なイメージとし、「学生に看護課程を勧める理由」を肯定的イメージとして、両者の各項目毎に関連を検討した。その結果「社会的評価が低い」と回答した者の中で、「人々に喜ばれる」に回答している者は、そうでない者より5%以下の危険率で有意に高かった。

考 察

1. 看護大学への進学状況

今回の結果より、看護大学への進学が多いのは進学校であることが分かった。この理由としては、進学校の大学指向の強さが考えられる。この指向には、学生自身が大学に進学することを目的として進学校に入学していることもあろうが、教師の進路指導も大学進学を目指して行われていることも影響していると考えられる。また進学校の、大学への進学能力もこれに関係していると思われる。

この結果よりこれまで少なかった進学校からの看護課程への進学が、4年制化が進むにつれて増加する可能性がでてくることが予測される。そこに、看護領域での資質をもった学生が含まれている可能性もあり、4年制化はこのような意味でも効果があろう。

2. 看護課程を志望する学生の動向

教師の約半数が進学志望者の関心と呼ぶと回答しているにもかかわらず、受験数、進路としての勧めやすさについては分からないとする回答も少なくない。これは大学教育の大綱化が進みつつある中で、身近な存在としての話題性はあるが、学生がそれを選択するかどうかという疑問と、進路として勧めるには教師側に未だ戸迷いがあるという両側面がうかがえる。これは新しく看護大学が設立されるようになってから時間が経過しておらず、まだその将来性についての評価及び予測が十分なされるまでに至っていないことが要因と考えられる。

現在の社会的ニーズに応じて、看護課程の増設は進みつつあり⁸⁾、看護職の職域も広がりつつある。それゆえに、今後は看護教育をする側においても、積極的な人材の確保、育成に努めることが

必要である。そのために、著者ら⁷⁾が述べた、高校生が看護職をより現実的にイメージする機会を確保できるような働きかけは大切である。それに加えて、進路を指導する高校教師に対しても、そのような変化を背景とした社会的期待と、看護の大学教育の意義・必然性や、大学で教育することによりもたらされる効果や将来性について納得できるように訴えかけていくことも重要であると考え

2. 看護職へのイメージ

一時、マスメディアに取り上げられた3Kのイメージのうち⁹⁾、「きつい」という言葉は、今回の質問項目の「勤務時間が厳しい」、「仕事の内容が厳しい」に相当する。この2つのイメージが、上位2つを占めたということは、教師へのイメージづけの要因になっている可能性はある。しかし、残りの「汚い、危険」に相当する「汚い仕事が多い」、「危険な仕事が多い」は、その回答数の少なから、必ずしもそうであると認識はされておらず、高校教師が客観的に現実を把握しているともいえる。また十分な改善にまで至っていない労働条件の厳しさは、従来から指摘されている看護労働の溢路であって¹⁰⁾、高校教師における評価でも依然厳しいものがあることが分かる。現在、行政及び医療関係組織機関でも改善が進められつつあるが、この点の改善はさらに急がれる必要があると指摘できる。

また、看護職について「社会的評価が低い」と回答している教師は「人々に喜ばれる」と回答している場合が多いこのことに見られるように、職業としての尊さは認識していながらも、社会的評価については低いと認識していることとも一致するものであろう。

以上の如く、教師の看護職に対するイメージは、看護課程を希望する高校生における看護職に対する非常に良いイメージの多さ⁷⁾と比較すると大きな相違が見られる。これはそれらの高校生は、看護職について資格のもつ尊さや、献身的側面に由来する自負心、資格のもつ現実的利点からとらえているのに対し、教師は生活の手段のための職業としての継続性、難易度といった現実的視点でと

らえていることの違いによるものと考えられる。これらの高校生と教師との間のイメージの相違や、教師のもつイメージの内容は、進路指導においては肯定的にも否定的にも働き得るが、本人の意志がまず強固に存在しない限り、積極的に勧める動機として強いものとはならないのではないであろうか。生徒の進路に影響を強く与え得る高校教師に、看護教育の専門性をさらに高め、新しい看護を切り開く人材をこの世界へ振り向けて貰う説得力のある働きかけができることが、我々看護教育を行う者の、今後の課題であろう。

おわりに

以上、進路指導にあたる高校教師の看護課程と看護職に抱くイメージの分析を行った。高校の教師には、看護教育の4年制化とともに看護課程への進学が増加するという予想があるが、まだ予想がつかないとするものも少なくない。これは大学における看護教育の意義、必然性、看護職の専門性やその効果についての情報を十分に受け取っていないことと同時に、労働条件や、社会的評価の不十分さに対する認識にも由来していると思われる。

今日、変革を遂げようとしている看護界の次の世代の担い手を確保するためにも、積極的に資質のある人材を看護界へ方向づけてもらうための働きかけが必要である。その働きかけは看護教育の

目的と社会的ニーズの高さを十分に理解してもらえ、情報の提供を行うことである。そして看護職の労働条件の厳しさに対するイメージの強さに対して、我々医療界は今後この改善に真剣に取り組むと同時に、その過程を広く示しつつ、良い評価を求めていく必要があるだろう。

文 献

- 1) 大学基準協会(編)：21世紀の看護教育—基準の設定に向けて—。(財)大学基準協会、東京、1-8、1994。
- 2) 厚生統計協会(編)：国民衛生の動向・厚生指標、臨時増刊39巻9号。東京、36-38、1994。
- 3) 荒川靖子、小野ツルコ、小原ルリコ、伊東久恵、喜多嶋康一：短大看護学科への進路決定に影響する要因の研究。岡大医短紀要 2：97-104、1991。
- 4) 田口正男：生徒を送り出す側からみた看護教育—安心して送り出せる看護界を期待して—。看護教育 32：646-652、1991。
- 5) 田口正男：看護婦志望者確保対策についての高校現場からの提言—志望者の確保は適切な情報提供から。看護 45：169-174、1993。
- 6) Maxine Dahl, 輪湖史子訳：ナースのイメージ—その変革の必要性—。INR 16：24-29、1993。
- 7) 前田直紀子、高畑晴美、太田武夫、近藤益子、喜多嶋康一：看護コース志望高校生の看護職に関する研究。岡大医短紀要 5：37-45、1994。
- 8) 厚生統計協会(編)：国民衛生の動向・厚生指標、臨時増刊39巻9号。東京、195-196、1994。
- 9) 行天良雄：看護婦が足りない。岩波書店、東京、20-28、1991。
- 10) 朝倉新太郎、吉津佳代子(編)：日本の保健・医療。労働旬報社、東京、76-80、1991。

The ideas about nursing course of senior high school teachers.

Harumi TAKABATAKE, Makiko MAEDA, Takeo OHTA,
Kouichi KITAJIMA, Masuko KONDO

Abstract

Currently, improvement of nursing curriculum has been done in Japan, including the establishment of a four year course at university, responding to the social needs for man-power for high quality nursing. A questionnaire survey by mail was done in 1993, to get ideas about the nursing course of high school teachers giving advice to students wishing to go on to university or college.

Thirty three high school teachers out of a total of 76 schools in Okayama prefecture responded. The results were as follows ;

- 1, Seventeen teachers (51.5%) answered that the increase of a four year course at university would be an incentive to students. Twelve teachers (36.4%) said that it might increase the number of students choosing the course. And also 12 teachers (36.4%) thought that they could recommend this course to students more easily than before.
- 2, They pointed out the harsh working conditions as the reason for a shortage of nursing manpower.
- 3, Their reasons why they recommend the nursing course to students were firstly the specialty and secondly devotion to people.

Key words : Nursing curriculum, Nursing education, Teachers of senior high school

School of Health Science Okayama University, department of nursing